**18歳のビビンバ**

遠藤英湖

私には美しい記憶のために特別好きな食べ物がある。それはビビンバである。

高校3年生の時、都内で開かれた国際交流会で知り合った若いビジネスマンに折り紙でパンダを折ってプレゼントした。「ヨさん」というソウル出身の眼鏡をかけた快活な青年だった。

ある日、渋谷の道玄坂の韓国料理店でヨさんにランチを御馳走になり、初めてビビンバを経験した。

純白の御飯を覆い尽くす美しく配列されたカラフルな野菜たちのてっぺんに、つやつや光る目玉焼きが一つ。まるで黄と白のドレスを身につけたお姫様と女官たちのよう。わかめのスープは海中で楽しそうにゆらめく天女の舞。圧倒的存在感で情熱的に語りかけてくる真っ赤なキムチも、珊瑚のように私を手招きしてくれる。

色彩の竜宮城に迷い込んだ私。しばらくビビンバ定食を目で楽しんでいると、食べ方がわからないと思ったのか、ヨさんは「辛いのは大丈夫ですか？」と確認し、コチュジャンを少し入れて一気にかき混ぜ始めた。

先ほどまでの「竜宮城」は跡形もなくなり、一瞬でグチャグチャに。呆気に取られているうちに「きれいに混ぜ合わせましたよ。さあ、どうぞ！」と満面の笑みですすめてくれた。「混ぜれば混ぜるほど美味しいんですよ」という言葉を聞きながら一口パクリ。ふくよかなゴマ油の香りをまとった甘辛酸っぱい人生初のビビンバは、複合的で立体的な、今まで食べたことのない美味しさだった。

帰り際にヨさんはポケットから取り出した韓国語の手紙を美しい発音で読み、「後でお友達に聞いてね」と手渡した。次の日、在日韓国人の親友が日本語に訳しながら読んでくれた。そこには、もっと早く知り合いたかったこと、帰国直前で残念だったけれど短期間でも出会えて幸せだったこと、将来立派な人になり、自分の夢を叶えて幸福な人生を送ってほしいことなどがハングルでびっしりと書かれていた。温かい真心からのメッセージに驚くとともに、心を打たれて、ポロポロと涙がこぼれたことを今でもはっきりと覚えている。

それから約30年。ヨさんはどこでどうされているだろうか。LINEもメールもなかった時代、いつの間にか疎遠になり、時は流れたが、いつまでも幸せでいて頂きたいと願っている。

「ビビンバの食べ方を教えてくれた韓国のお兄さん」とのご縁は、人生のひとコマを飾る小さな出会いに過ぎないかもしれない。しかし、鮮明な記憶として深く心に残り、私が韓国に親愛の情を抱き、韓国について学び続けたい強い動機の一つとなっている。私と同じように、個人的な出会いと良い記憶を積み重ねた人たちが両国の間でもっと増えれば、草の根レベルからのより一層豊かな日韓関係を築いていけるのではないだろうか。

そんなことを思いながら、今日もコチュジャンをたっぷり入れ、自分で「きれいに」混ぜ合わせたビビンバをしみじみと味わうのである。「思い出」という最高の調味料をふりかけながら。